

日系キューバ人の歴史（青年の島にて）

ーキューバ国別評価よりー

キューバ本島から南へ約100キロメートル、空路約30分に位置する青年の島には、人口約8万人が居住している。20世紀初頭からサトウキビ産業を中心として開発されてきた島であるが、近年では稲作や青果物の農業生産とともに、豊かな自然に恵まれ、ロバート・ルイス・スティーブンソンの海洋冒険小説「宝島」の舞台、国際的なスキューバ・ダイビングの名所として観光業の振興に大きな期待が寄せられている。同島には日系キューバ人約1,000人のうちの300人あまりが住んでおり、日系人の歴史及び草の根無償実施状況の調査を行うため、現地調査の一環として同島を訪問した。



青年の島・日系人との面談

キューバへの日本人の移住は、1908年の宮城勝氏（沖縄県出身）を皮切りに始まった。日本や近隣の南北アメリカ大陸諸国からの日本人の移民は、1919年から1926年頃を最盛期として、1930年代半ばまでに集中しており、1936年から1998年までの約50年間は日本人移民の入植はなかった。2008年に日本人移住100周年を迎え、青年の島にはキューバ国内最長老（105歳）の移民1世、島津三一郎氏を始めとして、移民5世に至る日系人が居住している（移民者の出身地は、沖縄県、鹿児島県、熊本県、福岡県、広島県、長野県、新潟県、福島県、宮城県）。

100年以上にわたる移民の歴史において、日系人は苦難に見舞われたことも少なくない。特に、第2次世界大戦において敵国民とみなされた日本人は、男性約350人が青年の島にある収容所に強制収容（1941～1946年）されただけでなく、残された家族の生活にも不穏な生活を強いるものであったと語り継がれている。現在、同収容所はプレシディオ・モデーロ国立記念館として保存・公開されており、強制収容された日系人の処遇についても展示されている。

このような歴史を経て、現在、日系人はキューバ社会の一員として日々の生活を営むとともに、毎夏開催されるお盆祭りなどの青年の島日系人会の活動を通じて日系人間の親交を図り、日本の伝統・文化を次世代に語り継ぐように努めている。

しかし、日系人社会も高齢化と世代交代が進み、直接日本を知る世代も少なくなっていることから、日本語ボランティアの派遣によって日本語教育の機会を設けたい、日系人会館など集まれる場所を確保したい、日本及び近隣諸国の日系人社会との交流の機会を設けたいなど、インタビュー時には、日本からの協力・支援への期待が示された。青年の島特別区の行政も日系人との関係強化に前向きであり、例えば日系人会館が計画されるなら、必要な協力は行いたいとの意向が伝えられた。

注：これまで青年の島に対しては、「青年の島特別区カミロ・シエンフエゴス融資サービス協同組合の農作地の生産性向上計画」など計9件の草の根無償を実施している。現地調査では、このうち「青年の島稲作生産強化計画」、「青年の島飲料水供給改善計画」などの関連施設を訪問した。



青年の島飲料水供給改善計画で設置されたポンプ場